

連携先ミュージアム： 京都市動物園 京都ミュージアムPBL科目：動物園をフィールドに

動物園の価値、そして役割とは何だろうか、改めて実態を把握すること、その中で大学生の役割は何かを考えフィールドで具現化すること

■受講生

(50音順)

田畑 多香子(同志社大学・政策学部・2年生) 前田 康博(同志社大学・商学部・3年生)
三橋 崇則(同志社大学・政策学部・3年生)、森 雄一(同志社大学・政策学部・2年生)
楊井 涼花(同志社大学・政策学部・2年生)、山越 奈美(同志社大学・政策学部・2年生)
領田 美依奈(同志社大学・商学部・2年生、渡会 葵(同志社大学・政策学部・2年生)

■担当教員

服部 篤子(同志社大学・政策学部・教授)

活動目的・概要

当初は、動物園の魅力を伝えること、そのための大学生の役割を探り、環境教育イベントを実施することを目指しました。動物園の来場者はM字カーブを描くように、比較的若者層が遠のくためです。調査と対話を繰り返しました。コロナ禍でも可能な調査として動物園が発信するHPの調査や各自が他の動物園を訪れて比較することなどを通じて実態の把握に努めました。また、講義の中にある数々のテーマの中から、動物園は野生への窓口、「動物園と野生の動物はどちらが幸せか？」という問いに着目しました。その問いによってより動物園の実態を把握することができるのではと考えたためです。

動物カメラマンさんから数々の迫力ある写真と話を得て、学生たちの視点や世界が広がっていきます。そして、自らの感動を伝えることが他者に対して動物園の魅力を伝えることにつながる事が分かってきました。そのうえで、動物園でのイベントを企画し、最終的に絞り込んだイベントを実施しました。新たな発見として、動物園を取り巻く課題を見出すことができたと感じています。



◆主な活動

春学期:ZOOM

2020.5.29 ガイダンス(自己紹介、目標の設定等)

2020.6.12 講義と対話

「野生動物との共存を目指して“生まれ変わった京都市動物園” by 動物園田中先生

2020.6.26 京都市動物園ウェブ調査結果の共有

2020.7.10 動物園とZOOMのハイブリッド授業。近隣の学生は動物園に訪問し実況する

2020.夏季休暇中 自主調査(他動物園に行く)

2020.9.27 ワークショップ「サバンナの風を感じる」

2020.10.31 動物園イベント企画

2020.11.23 イベントの準備

2020.12.5 動物園イベントの実践(AM)、振り返り(PM)

2020.12.13 成果発表会

活動の成果



動物園の動物と野生の動物はどちらが幸せか？

京都市動物園でのフィールドワークを実施し、生き物・学び・研究センター所長である田中さんのお話や、動物カメラマンである渡壁さんのお話を伺う中で、動物園の動物と野生の動物はどちらが幸せかという問いについて考えました。田中さんのお話からは、動物園はレジャー施設であるだけでなく保全と研究にどれだけ貢献しているかということ、渡壁さんのお話からは動物園の動物と野生の動物の違いを表情や毛並み、行動といった側面から知ることができました。

それらのお話を踏まえ、夏休みにはメンバー各自が京都市動物園以外の動物園でフィールドワークを行うことで、京都市動物園と他の動物園との違いを知ることができ、動物園で暮らす動物たちに対する理解も深まりました。その結果、動物園の動物たちも彼らなりに幸せなのではないかという考えにまとまりました。そして、動物園の動物も幸せであるということを来園者にも知ってもらいたいとの想いで、イベントを企画することになりました。

感動を伝える、知的好奇心を抱く企画。～これでキミもドヤ顔になれる！～

12月5日(土)に京都市動物園にて、聴いた人の知的好奇心をくすぐるような知識を発信すること、そして動物園で暮らす動物たちについて知ってもらうことを目的に、イベントを実施しました。2人1組の4チームに分かれ、それぞれ異なる方法で担当する動物に関する知識・情報を発信し、京都市動物園を訪れるお客さんに聴いてもらいました。

・キリンチーム

フリップを使いキリンについての様々な知識を説明する中にあえて少しの間違った内容を含ませ、それに相方がツッコミを入れる形で問いかけと解説を行い、正しい知識を学べるようにしました。自分たちのような大学生を対象とし、少し難しい内容も盛り込んだ点と、親しみやすさを感じてもらえるような話し方を工夫しました。コロナで動物園に行けず、授業もオンラインで行う状況の中で計画を立てることは苦勞しました。

・ゴリラチーム

ゴリラに関する知識をマルバツクイズで紹介しました。子供連れだけでなくゴリラ好きの方にも楽しんでもらえるように、論文も参考にしてマニアックな知識も盛り込みました。ターゲット設定やどの様に伝えたらよいかについては苦戦しました。

・ゾウチーム

田中さんのフィードバックももらいつつゾウに関する知識を調べ、3～4択のクイズにして出題しました。子供たちに喜んでもらえるよう対象年齢を低めに設定しました。笑顔で楽しそうに話すことを心掛けたことでクイズに参加してくれるお客さんもあり、楽しんでもらえてよかったです。動物園の動物が幸せであることをクイズに盛り込むことができなかったことが反省点です。

・シマウマチーム

楽しんで知識が得られるように、シマウマをテーマとした漫才を披露しました。動物園の動物も野生の動物同様に幸せなんだということを伝え、動物園の動物に興味を持ってもらうために、一般的なシマウマの生態や知識だけでなく、京都市動物園にいるシマウマの情報（最近子供が生まれたことなど）も盛り込みました。ミルクボーイのコーンフレークの漫才をモチーフとしましたが、関東出身者と関西出身者による凸凹コンビで息を合わせるのには苦勞しました。ユーモアを持って伝える大切さを学びました。

当日はクイズに参加してくれるお客さんや立ち止まり耳を傾けてくれるお客さんもあり、また動物たちも興味津々でこちらに近づいてきて様子をうかがっていたため、発表と動物たちの反応でよりお客さんたちの目を惹きつけられたのではないかと思います。

活動を振り返って



※約半年間の活動を振り返っての感想

動物園の動物と野生の動物のどちらが幸せか、という問いについて考えることに取り組みました。意見が分かれていましたが様々な観点をとおして納得のいく考えができました。その経験をお客さんにも伝えたいとなったもののクイズなどのイベント内容に入れようとするとわかりやすさとのバランス調整が難しく、結局断念してしまったことは残念に思っています。

イベントに関しては、ターゲットにあわせた伝え方、研究成果からクイズに転換するアイデア、フィールドでお客さんに関心をもってもらうこと、などはいずれも容易ではなく苦心しました。お客さんが参加しやすい雰囲気づくりができていなかった点や、入り口での声掛けやチラシの準備などの告知を十分に行うことができなかった点が反省点として挙げられます。

この活動を通して、自分で考えること、自分の目で確かめること、そして考えたことを実践することを学びました。実際やってみて分かることが多いと感じました。

また、動物園の背景を知り、文献や情報の発信元をはっきりさせてクイズなどを作成するという大学生らしい学びを得ることができました。フィールドワークを行う授業だからこその学びと体験が得られたと思います。

担当教員からのコメント

服部 篤子

新型コロナウイルス感染症による制限のある中で、フィールド授業の在り方を探ってきました。結果として受講生たちは、「命」が育まれるフィールドで何かを感じとってくれたかのように、予定していた春学期の半期だけではなく1年を通じて積極的に行動し、皆が力をあわせて自分たちの授業を創っていくカタチになりました。さらに、動物園から発信される興味深い情報、そして田中先生からの文献紹介やフィードバックがあり、自然と深く学ぶ環境を得ることができたようです。一方で、知的好奇心をくすぐろうと企画した内容が必ずしもお客さんに伝わらない場面も経験します。主体性をもって学ぶことの楽しさと重要性を感じ取ったことで次へのアクションにつながると期待しています。



活動資料

